
君は が好きですか

近江 駆琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は が好きですか

【Nコード】

N1518Q

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

君は が好きですか？Ans・好きですが、それは親愛の情です。じゃあ、どうして君はそんなに愛しいのですか？Ans・別に愛しくなんてないけど…軽く読めるShortStoryです。

始まりから彼は自由

明日は無いと、いつもそう思っていた。

いや、そうじゃない。

明日は無くてもいい、が正確だ。

「准^{ジュンリ}里^リっていくつなの？」

「じゅー…いくつかな？」

ふかふかの羽毛布団にくるまっていると、ぺらっと端っこをめくられて覗きこまれた。

いたずらっぽく笑うその唇がセクシーで好きだ。あと、布団をつまんでいる2本の指も割と好み。

さっきまで無我夢中にシーツをかき乱していた指だ。

「じゅー…いくつなの？」

「じゅーいくつか」

「なるほど」

「いつまでもめくってるな。寒い…」

別にこの部屋の室温は低くないのだが、あつたまつた布団に比べたらどこも寒い。

掴まれていた布団を引っ張ると簡単にもとの暗闇と、ぬくもりが手に入った。

「しょうがないなあ。私も、もうちょっと寝ちやおう」

「あっそ、おいで」

まだ乾ききらない肌が近寄ってくるのに気付いて、腕を広げて彼女の身体を抱きしめた。

「うっわ…身体冷えてるし」

「じゃあ、またあつためて？」

「やだ」

ちゅっ、と身体に触れる唇を引き離して目をつむると、くすくすと少し笑われた。

これが、今日の始まり始まり。

とりあえず彼は寝起きも自由です

誰かが俺の身体に触れる感触に、少し辟易して寝返りを打った。そういえば、抱きしめていた身体はもうない。

でも、違う。今俺に触れているのは昨夜肌を合わせた女じゃない。

「んー…触んなよ。俺、もうたた…」

「っ！この馬鹿っ！！ふざけた事言っでないで起きなさい！！」

とりあえず相手がだれかなんてどうでもいいけど、もう頑張れない。

くしゃつと髪をかき乱すその手を握って、手のひらにキスをする而降ってきたのは大きな怒声、いくら俺でも瞼が自然と上がった。

「…レイラ？まだ時間じゃないだろ？」

「もうっ、今日から標準時が変わるって昨日言っただじゃない。さあ、起きなさいっ！……っ、い、いやぁー！！」

そういえばそんなこと言っでな。だとしたらまだ俺は十分に眠っていないはずだ。そう結論づけて再び瞼を下ろそうとしたのに、レイラは俺の布団を剥ぎ取って、悲鳴を上げた。

「やだやだっ、なんで…なんで准里、裸なの！？信じられない、露出狂！！」

「…そう思うならその抱えてる布団を返してくれるか、そこにある服を取ってくれ」

シて、抱いて寝たら裸なのは当然だし、布団を剥いだのもレイラだし、その布団をきつく抱きしめて離さずに、俺の裸体を見ているのもレイラ自身なのに。

俺が変態呼ばわりされるのはおかしくないか。

「どうした！！レイラ、准里、なにがあっ…た、って…え？」

「あー、だから服を取ってくれってば」

レイラの激しい悲鳴を聞きつけて、シュツという扉の開く機械音とともにマグリスを先頭にぞろぞろと人が駆けこんできた。

しかしみな、部屋に踏み入れたところで足を止め、目を見開いて絶句している。

「この場合、変質者になるのはどっちだ？……くしゅっ！！」

せめて、俺がレイラに手を出した、という噂が広まらない事を願うばかりだ。

説明くらいはきちんとしましょう

第三次世界大戦から幾星霜。：多分2000年くらい。

人は繰り返す戦争の教訓と、地殻変動による大陸構造の変化に従い国を失った。

つまり、世界は地球という一つの国となったのだ。

ついでに前回は6つあった大陸も今では巨大な大陸が1つあるだけである。

意外にも第四次世界大戦は起こらずに、言語も、人種も入り混じり、平和になった地球は外へ。宇宙へとハイスピードで手を伸ばしていた。

まずは月へ。火星へ。フォボス、ダイモスへ。果てはもっと遠くへと

結局そういった星へと移り住んだ人間が地球と異なった国家を作り、現在の第一次太陽系大戦が始まった。

『歴史は繰り返す』とはよく言ったものだ。

どうやら照明が黄色いようです

大騒ぎするレイラやマグリスを部屋から追い出し、仕方なく睡眠を欲する身体をなだめて俺は支度を整えた。

2カ月の航宇宙^{こうくう}の末、俺の乗る居住艦「O-113」は月へ寄港する。よって今日からこの艦は標準時刻を月時間に変更したのだった。そのため今夜は3時間ほど少なくなり、従来なら現在時刻は5時なのに、時計は全て8時を示している。

「あつ、准里だ！！ねえねえ、准理、レイラ姉さんに襲われたんでしょ？」

「ああ？また変な噂になってるな」

眠い目をこすりながら食堂に入ると、ちょこまかとませた子供達がすぐさまたかってきた。ぐるりと見渡すと離れたところで困ったようにマグリスが頭をかいていた。

どうやら口ばかり達者なこいつらに、騒ぎをうまく説明できなかったらしい。

「あんまり准里が焦らすからだよね？」

「そうそう、あーゆータイプに難しい駆け引きはだめだって!!」

「いい加減にしろ。そういうこと言ってるから、お前らはお子様なんだよ」

イエス、と答えるのもノー、というのも噂に拍車をかけるだけ。ちびたちを放って俺はマグリスの向かいに座った。

「さっきは悪かったな。朝食は？」

「入らない。寝たい」

「時差ボケか？珍しいな」

「違う。今日から時間変わるの忘れてシてたから」

もうずっと宇宙船内で暮らしているの俺にとって、時間の調整など当然の事だ。今眠いのは実質眠っていたのは2時間程度だから。

しかし、この艦の艦長という立場上、寄港の際の手続きは俺がしなければならぬ。

「お前もよくやるな…そういえば、この後はどこに行くんだ？」

「前線」

「はあ！？お前、なんで？今お前がいるのは中立国だろ？」

「その契約もこれで終わりだから。次は北翼軍側の国と契約してる」

太陽系大戦、と言っても戦争を全ての国が戦争状態にあるわけではない。約半分の国は我関せず、という中立の立場であり、残りの半分が北翼軍と南翼軍に別れて戦っているのだ。

10年以上続いているこの戦争も、すでに大義などなくしている。

「なんでまた戦争になんていくんだ…」

「ああ、月との交信の時間だ。じゃあな、マグリス」

「おい、話はまだ終わってない!!」

「でも、時間もない」

「ごしごしと目をこすってみるけれど、相変わらず照明はすぐそばに浮かんでいる月より黄色かった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1518q/>

君は が好きですか

2011年1月16日08時45分発行